

種名 コナギ
万葉時代の呼名 こなぎ・小水葱



詠人 作者未詳

万葉集卷十四 三五七六

苗代の小水葱が花を衣に摺り
馴るるまにまに何か愛しき

【現代訳】

苗代のコナギの花で染めたものが、だんだん着なれてくるように、あの娘も、親しくなるに連れて愛しくなってきます

【コナギの解説】 ミズアオイ科に分類される一年生の水田雑草

一年草で、地下茎などは持たない。全株やわらかく、緑色で葉身表面はつやがある。晩夏から晩秋にかけて葉柄の基部に短い房状の穂を出し花をつける。花はホテイアオイのそれに似るがずっと小さく、花弁はより細長い。花色も青紫となり異なる。東アジア全域に広く分布し、日本国内でもほぼ全土にわたって見られる。日本人との付き合いは古く、同属のミズアオイと共に万葉集に本種を読んだ歌が収録されている。また江戸時代頃までは食用にされていた。

しかし今日の日本では、水田耕作における強害草のひとつに数えられている。本種は成長に際し過大な窒素分を要求するので、水田に生えた場合イネの窒素吸収を阻害する。そもそも発芽に際して酸素を嫌うという変わった性質から、地表を水で覆う水田は結果として本種に絶好の環境を提供している。ゆえに無農薬農法によるコメ作りをしている田に執拗に生え、こうした農法に従事する農家の悩みのタネになっている。